

期の輸入医学より、やがて中期の水戸藩医学の自立となり、晩期には他に類を見ない光輝ある業績を挙げるにいたった過程が述べられる。

第八章では基礎医学としての解剖学、応用医学としての針灸学を觀察し、また水戸藩の代表的疾患を各々の時代について、疾病觀とそれに基づく医療の変遷を検討している。

第九章では水戸藩の医師たちが、藩の儒者との交流のうちに支援をうけ、ときには激励され、ときには鋭い批判を浴びながらも、幕末藩内外の動乱の中で精進を続けていた様子が描かれる。

第十章は水戸藩医学の特色として、原南陽と本間家の蔵書目録、水戸藩医家墨跡、水戸藩医学史年表などがあり、本書のまとめとなっている。

本書は別添の人名・事項索引を含めて千頁ちかい巨著で、とても一気に読み通せる書ではないが、ここに発掘され、明らかになった史実には計り知れない価値がある。今後は江戸期の医学史研究にも必須の文献となるだろうし、後世に残る名著といっても過言はない。

(真柳 誠)

〔ペリカン社・T113-0033 東京都文京区本郷二二四一四、☎〇三―三八一四―八五一五、一九九六年十二月発刊、菊判函入、九五九頁、索引二六頁、一八、〇〇〇円〕

織田<sup>いふな</sup>五二七著

『杏仁 浪漫日本医学外史 古医法より蘭方まで』

著者は佐賀県で三百年以上も連続とつづいている医家の十三代目の医師であり、病院の経営や全日本病院協会の顧問など多忙の日々を送りながら、一方で日本ペンクラブや文芸家協会の作家として健筆を振っている方である。『海の戦士の物語』『人生ロマンの日々』『大正ノスタルジア』『たそがれの我が日々』『ウイルスは神の使いか』『碧老録』など次々に出版されてベストセラーにもなっているが、このたび満八十歳の傘寿を記念して十冊目の本書を執筆されたのである。

著者の家には、神農像をはじめ古医書が二百数十冊も秘蔵されており、その貴重な資料は既に佐賀医大解剖学の穂吉敏男教授らによって研究整理せられて「鹿島織田家の古医書」として刊行されているそうである。そのうち漢方医書は六十三種百三十八冊であり、残りは蘭方関係であるが、著者の祖父の織田良益は緒方洪庵の適塾に学んだ渋谷良平に師事して蘭学を修めた人である。そして良益が一字一字丁寧に驚ペンで写した蘭書の写本をみてその勤勉努力に驚き、更にまた沖繩県のコレラ流行を記した「織田良益虎烈刺論」の著述を読んで、良益が寝食を忘れて病人の治療に当り予防対策に奔走したその献身ぶりを知って深く感動したのが本書執筆の動機となっている。本書の終り近くに著者は「わが家の古医書を見て、いつの時代もそれなりの人がいて必死に努力精進した

のднаあ、と感動し、浅学菲才をかえりみず、膨大な文献を整理し、書きすすんでいるうちに、ロマンを感じ、『浪漫日本医学外史・古医法より蘭方まで』と題したのである」と記されている。

それでは著者はどんな人々にロマンを感じたのであろうか。本書は次のような六つの章に分けられて物語が進められている。即ち

第一部 古医法― 古代より中世まで

第二部 日本の医学・医療の流れ

第三部 南蛮・紅毛医学の渡来

第四部 シーボルトと弟子たち

第五部 ポンペと松本良順

第六部 適塾・緒方洪庵

、という各章である。

まず第一部では、中国からの医学医療の伝来には遣唐使、遣唐使そして留学僧たちの功績が大きいことを述べて、最澄、空海および僧玄昉をとりあげている。道教や易占と結びついた密教が読経、呪術、薬物や土木により医療福祉に寄与したことや、拝火教によるペルシャ文化や薬物の伝来など、わが国の医学に宗教が密接にかかわったことをくわしく語られている。

第二部は日本人による医学医療の歴史を辿っており、一般民衆の心と身体の病いのために僧医たちが活躍したことや、やがて日本独自の医学が生まれたことなどを述べている。そ

して日本最初の解剖を敢行した山脇東洋と、フィクションながら山本周五郎の「赤ひげ先生」をとりあげて熱っぽく語られている。

第三部では南蛮医学のアルメイダとフェレイラをとりあげて、そのあふれる人間愛も語っている。つづいて長崎出島の蘭館医のテン・レイネ、ケンペル、ツェンベリーそしてシーボルトらにふれて、遠い異国の未知の文化に寄せる彼らの関心と熱意を述べている。

第四部はシーボルトとその門人たちのストーリーであるが、たまたま一九九六年がシーボルトの生誕二百年に当り、またジェンナーの牛痘法開発二百年でもあることから、シーボルトが詳しく語られている。著者は彼が患者を通じて実地に臨床講義を行ない、薬草や薬学を教え、種痘法を伝えるなど、その大きな功績と彼のパイオニア精神とを高く評価している。

第五部ではポンペが気迫に満ちた律気な教師であり、はじめて正式な医学教育を行ない、洋式病院を作った足跡を語って、門弟から神とまつられる程に慕われたことを述べている。そしてポンペを助けてよくその功をなさしめた門人の松本良順の苦心と勇氣にも筆を進めている。

最後の第六部は緒方洪庵が語られている。洪庵は多くの訳書を出して西洋医学を教え、種痘の普及につとめ、コレラのために奔走した。病者を見ると心から同情し、使命感に燃えて医療に当り、情熱をもって門弟を教育した洪庵には、凜と

した気魄と不拔の勇氣があつた、と語られている。

本書は医学史の研究書として書かれたものではなく、「ロマン的に、情緒的に」書かれた医学外史である。そして著者がとりあげた先人たちの逞しい意志と激しい情熱がたっぷり出すドラマは、読者の心に何かを語りかけているようである。科学ジャーナリストの少ないわが国に、このような読みやすい医学物語が次々と刊行されることを熱望する次第である。

(津田 進三)

〔致知出版社・〒150-0001東京都渋谷区神宮前六―1―211―18、  
☎〇三(三四〇九)五六三二、平成九年六月発行、A5判、  
三二八頁、本体価格一五〇〇円〕

日本眼科学会百周年記念誌編纂委員会編

### 『日本眼科学会百周年記念誌』全七巻

日本眼科学会は、明治三十年第一回の学術総集会を開催した。平成八年に第百回の学術総集会が開催され解剖学会について二番目、臨床医学系では、第一番目となった。これを記念して百周年記念事業が行われ、近代眼科の記録を出来る限り整理し、先人の歩んで来た道を学び、これを後世に残すと言う、学会の一つの大きな目標が全七巻総頁数約二千五百頁(総重量約8kg)に及ぶ百周年記念誌の発刊であった。

日本眼科学会では既に六十年史、七十年史、八十年史、九十年史を発行し、いずれも貴重な史料となっているが、今回は四年余の歳月をかけて特に三島済一顧問の発案により従来

の記念誌を超える「日本の眼科の歴史」を編纂すると言う、馬嶋昭生編纂委員長両氏の大変な努力により各責任編集委員の下に多くの委員が参加し、日本の眼科学会の創生期から現在に及ぶ資料が発掘され、整理された。また委員の中には多くの医史学会会員が参加した。

各巻の責任編集委員は、第一巻、三島済一、内田幸男、第二巻、内田幸男、第三巻、丸尾敏夫、第四巻、渡邊郁緒、第五巻、三島済一、第六巻、石川哲、第七巻、清水弘一となっている。第一巻は明治時代の医学の発展と眼科の変遷が記述され、多くの貴重な記事や史料が三島済一によって全国から集められ、多くの新事実が発見され、膨大な資料を全て自分で入力整理した。第一巻に記載された事項の殆どは二巻・三巻の大正時代から更に昭和への発展を見る。史料は第二巻、日本の眼科の歴史・大正・昭和(第二次世界大戦終結迄)、第三巻、昭和(第二次世界大戦後)及び平成編(平成七年三月末迄)に引き継がれ記述されている。

第一巻では一章から十一章に構成され、第一及び二章明治医制と医学教育(特に眼科)の変遷、第三章及び五章医学雑誌(眼科雑誌と眼科専門地方学会の発展、第四章 日本眼科学会の発展、第六章及び七章 眼科医と国際関係国政及び医政、第八章 陸軍、海軍軍医と眼科医、第九章及び十章 眼科と公衆衛生、病院、施療、第十一章 眼科医療機器(義眼、眼鏡、点眼薬)と各章に実に詳細に記述されている。

第二巻では第一章 医学教育制度の発展から始まり、第二